

あまの仕事について
 —新規就業を目指す方へのメッセージ—

東安房漁業協同組合
 白浜町あま連絡協議会
 平野 美乃

1. 地域の概要

私が住む南房総市白浜町は、房総半島の最南端に位置し、冬でも花が咲き誇る温かな気候に恵まれている（図1）。また、東西に伸びる海岸線は砂浜域と岩礁域が入り交じり、雄大な自然美を形成し、岩礁域には豊かな藻場も育まれている。

主な産業は、自然環境を活かした、アワビなどの磯根漁業と花卉や野菜栽培などの農業で、それらの地域資源を活用した観光業も盛んである。



図1 南房総市白浜町の位置
 (黒塗りの範囲が白浜町)

2. 漁業の概要

私は東安房漁業協同組合の下部組織である白浜町あま連絡協議会に所属し、白浜町であま漁業を営んでいる。

白浜町的主要な漁業は、アワビやサザエを獲るあま漁業、イセエビを獲る刺し網漁業、ヒジ

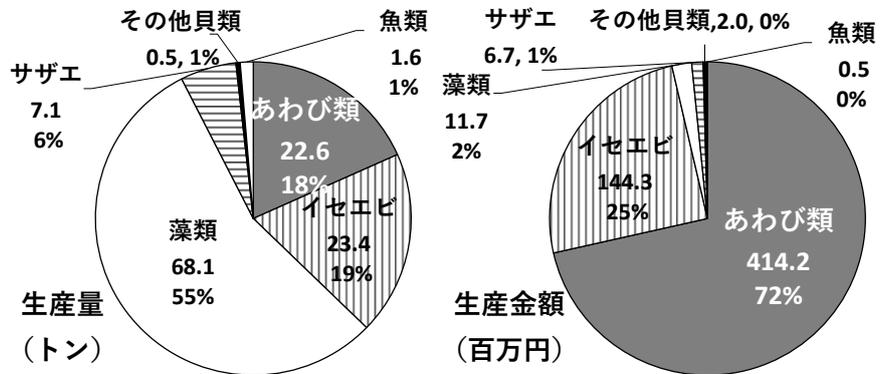


図2 令和4年度の白浜町における生産状況

キヤハバノリを採る採藻漁業である。令和4年度における主な魚種の生産状況は、図2のとおりで、アワビは生産金額に占める割合が72%と高くなっている。また、豊かな藻場から生産される白浜町のアワビの品質は、市場での評価が高く、特にクロアワビは「房州黒あわび」として、千葉ブランド水産物にも認定されている。

あま漁業の操業は5月から9月上旬までのおよそ4か月間であるが、実際にその期間内で操業できる日数は海が穏やかな30日間程度である。あまの漁期中は、あまを専業とする者が多く、漁期

外には農業、イセエビの刺し網漁業、自営業、パート・アルバイトなど様々な仕事に就いている。私は漁期中には専業であるが、漁期外にはイチゴ農園でアルバイトをしている。

あまの操業は、水深3～10m程度の海底まで一気に潜り、岩場に隠れているアワビを見つけ、磯がねで傷をつけないように漁獲する(図3)。潜水には水圧に体を順応させる耳抜きのコツを習得する必要がある。また、潜水は体力の消耗が激しいので、まげ樽を浮き輪替わりにして、海面で休憩する。さらに、上下に分かれたウェットスーツを着ていても、体は冷えていくので、一旦、海から上がって暖を取り、体力を回復させてから再び海へ向かう。このようにあま漁業は身一つで行える半面、体を酷使する。



図3 あまの道具
(→:磯がね、⇒:まげ樽)

また、あま漁業は一見、個人の漁業と思われるが、漁港やあま小屋の管理はもとより、漁場の管理についても共同で行う作業が多い。

現在、白浜町の地先では、種苗生産されたアワビの稚貝を有効利用するため、平板やU字溝を投入して造成した4か所の漁場へ、毎年1か所ずつ稚貝を放流し、放流後の4年目でアワビを回収する輪採漁場を運営している。その管理には作業を効率的に行うため、スクーバ潜水の技術を有する者が複数名、他の作業にも大勢の人手が必要になる。また、密漁監視は海辺に住むあま達が目を光らせ、組合や地元の警察と連携している。このように漁場管理にはチームワークが求められる。

3. 研究・実践活動取組課題選定の動機

白浜町のあま漁業者は他地区の漁業と同様に高齢化している。当町の令和4年度におけるあまの漁業者数は217名であり、その年齢構成は60歳代以上のベテラン世代が全体の65%と多く、30歳代以下の若い世代はわずか6%となっている(図4)。また、館山水産事務所が令和元年10月に実施したアンケート結果では、後継者がいるあまは7%であった。

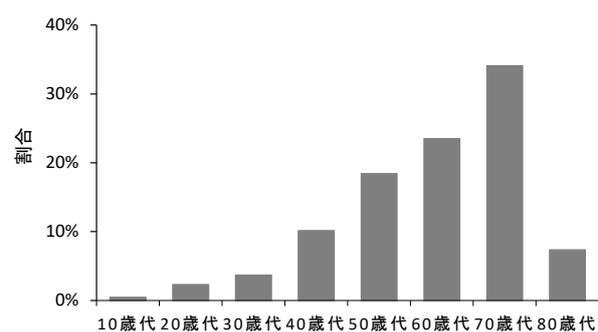


図4 白浜町におけるあま漁業者の年齢別構成比

現状、若い世代の新規就業がほとんど見られない中、ベテラン世代のあまの急激な減少が見込まれることから、漁場管理がおろそかになる心配がある。

一方、都市部で暮らしている人や海が好きな人、地元の子供達の中にも、海や自然と向き合いな

がら仕事をしたい人もいるはずである。そのような人が白浜町に定着し、あま漁業を支える一員になるように行動することは、課題を解決する1つの方法だと思う。

そこで、技術習得やあま達との繋がりなど、自らがあまになるために経験してきたことについて、就業を目指している人達に伝えることで、新規就業の手助けになれば良いと考えている。

4. 研究・実践活動状況及び成果

(1) あまになるきっかけ

私は、小学生のとき、親の仕事の関係で神奈川県から白浜町に引越してきた。地元の人と結婚し、3人の子育てをする中で、夏に家の目の前にある磯でよく遊んでいた。それを知ったことなのか、親戚のあまさんから、突然まげ樽というあまが浮具として使う樽をもらった。それを子供と遊ぶときに浮き輪代わりにしていたのを何度か他のあまさんが見かけていたようで、親戚のあまさんから、「海が好きだったら、こーよ（おいでよ）。1人で潜っていると危ねーからあま小屋こうさー（来なよ）。」と声をかけられた。ちょっと興味があったので、家族に相談すると「お母ちゃんあまさんになるの？そしたら、毎日貝が食べられるの？」と子供達は、嬉しそうにはしゃいでいた。家族の応援もあり子供の喜ぶ顔が見たい、潜って海の中を見てみたいという気持ちになり、あまの道へ踏み出した。

あまになるためには、通常は組合に加入する必要があるが、私の嫁ぎ先は、たまたま組合員資格があったため、すんなりあまの道へ進むことができた。

(2) あまへの道

あまは今までと違う世界で驚きの連続であった。先輩たちの教えを受けながら、まずはまげ樽から真下へ潜る練習から始まり、初めて入った海は、真っ暗で何も見えなかった。まず怖いと感じ、自分の身長の高さですら潜れない。寒いし、波に揺られて気持ち悪いし、たぶん最初は30分も海に入っていられなかった。海から上がりあま小屋で薪を焚いて火で身体を温めることも初めてのことで、とても熱く煙たくて目が開けられなかったことを覚えている。

そして、潜っても潜っても何も獲れない日々は続き、寒さと波の揺れで、酔い止めを飲んでいても吐いてしまう毎日であった。やっと底まで潜ることが出来てサザエが1個獲れた時には感動したが、ほとんどは苦しくて、上がる途中で掴んだ天草を家の庭に干す毎日であった。

全然思いどおりにならずに落ち込んでいると先輩が、「どんなに辛くても獲れなくても海を絶対に悪く言ったり、嫌いになったらダメだぞ(ダメだぞ)。海には、常に感謝の気持ちをもって潜んねえば、おいねーよ(潜らなければいけない)。」と言葉をかけてくれた。あま小屋に代々伝わる教えは、今も私の教訓になっている。

あまになって5年が経った頃、子供も学校に通うようになったので、本格的にあまに専念できる

と考えていたが、白浜町は交通の便が悪く、私が車で学校まで送迎しなければならなかった。家事の時間も考えるとあまに専念する時間は取れず、また、まだまだあまでの収入は見込めなかったため、毎月決まった収入を得られるパート勤めも始めることにした。

パートへ出ると年間 10 日間くらいしか潜れないので、あまとしての技術はなかなか上達しなかった。パートをしている間も「あまに専念したい。」という気持ちがあったので、もどかしい気持ちのまま過ごすことになった。

「上達するには、もっと潜って経験を積まない」と先輩に言われ続けて 5 年が経った頃、パート先のホテルの閉館が決まったこともあり、そのタイミングであま一本の道へ戻ることにした。

そこからは、あまに専念することで、毎年少しずつ深く潜れるようになり、今では水深 8 m 付近も漁場に出来るようになった。始めはサザエ 1 個をやっとの思いで獲ったのが、あまになって 12 年目で、1 日 5 kg 程度のアワビやサザエを水揚げできるようになり、ようやく「職業はあまです。」と胸を張って言えるようになった (図 5)。

あまへの道から得られた技術をいくつか述べたいと思う。まず、潜水するときは、身の安全とアワビを獲ることだけを考え、余計なことは考えない。肺全体へ空気を送り込むイメージでゆっくりと深く息を吸い込む。無駄な動きはせず、水圧がかかるため、耳抜きを頻繁に行う。そして、トラブルに対応できるように、息に余裕をもって海面へ戻る。また、アワビを見つける目を養うことも重要である。漁の後は体が冷えているので、必ず、あま小屋で火に当たり体力を回復させる。体のケアを怠らないことが、あまを長く続けるコツである。いずれの学びにも、先輩たちの助言や身近なあまの動きを観察することがとても重要であるが、体質には個性があるので、素潜りの経験を重ねる中で、技術を身に付けることが求められる。



図 5 あま漁の様子

(3) 輪採漁場に関わることで

あまになって 13 年目に地元の仲間潜り (輪採漁場の管理組織) に入り、あま小屋の仲間とも色々話すようになった。その時に聞いたのは、「あまの仕事は 1 人で漁に出るだけではない。輪採漁場の管理には皆で協力することが多く、その作業にはスクーバ潜水技術が必要である。地区でスクーバ潜水が出来る人が 1 人しかいないから、潜水士の資格を取得してくれると助かる。」

とのことであった。

私は「少しずつ上達して自分の水揚げが増えればいいな。」と考えていたが、その現状を聞いて、「私にできることなら協力したい。」と思い、潜水士の資格を取ることにした。決心したときには、すでに漁期に入っていたので、潜った日の夜の試験勉強は、眠くて何度も同じところを読んでしまう始末で、朝早く起きて頑張るしかなかった。テキストは聞きなれない言葉ばかりであったが、それでもなんとか必死に覚えて資格を取得した。免許証が届いたその日には、仲間と磯の資源を大切に守り、育てていく強い責任感が芽生えたことを覚えている。

資格は取得できたものの、実際に潜水技術を身に付けなければ意味がない。そこで、仲間の協力を得て、スクーバ潜水の練習に励んだ。初めて潜水する前の日はとても緊張し、テキストを読み返しYouTubeを見て勉強したが、当日はかなりテンパってしまった。最初は、港の中で練習をして、その後船で移動し深い所へ行った。船から降りると浮力の調整が上手くできず、下まで行くのにかなりの時間がかかってしまった。普段潜るときは、息を止めて潜るのに水の中で息が吸えるという変な感覚が怖くて不安であった。

それでもその後、輪採漁場の藻刈り、アワビの獲り上げ、平板やU字溝の設置と積み直し、ブイ入れと仲間と面倒を見てもらいながら経験を積んで、潜水士の技術も少しずつ上達している(図6)。

潜水士の作業に携わっていく中、仲間潜りの会員との絆が深まり、アワビを磯がねで剥がすタイミングや好漁場などの情報交換も行うようになった。また、「あま連の総会や反省会に出席し、必要があれば意見を言ってもらいたい」と助言をもらったので、密漁監視の方法など気が付いたことがあれば、発言を心掛けるようになった。最近では地区の会計も担当し、主体的に活動へ参加している。



図6 輪採漁場での潜水作業

(4) 海女まつり

海女まつりとは、野島崎灯台の近くにある巖島神社のご神体、弁財天に海の安全と豊漁の祈りを捧げると共に、海で犠牲になられた方々を供養するおまつりである。まつりのメインイベント「海女の大夜泳(だいやえい)」では、昔の仕事着である白装束を着て松明(たいまつ)を持ち、まげ樽に乗り、列になって皆で泳ぎながら夜の海に大きな輪を描く(図7)。

私がこの町に越してきて初めて見た海女まつりでは、大勢の海女たちが松明の炎を掲げて真っ暗な夜の海を泳ぐ光景はカッコよく、子供心に感動したことを覚えている。その時は、まさか

自分がその輪に加わるとは思ってもいなかったが、海女になり、先輩達のように自分も地域に貢献していこうと決めて、15年前から参加している。定住して地域の一員として生活していくためには、この様な取組も重要だと考えている。

令和5年の海女まつりでは、私より先輩が誰もいなくなったので、ペースメーカーとしてトップを泳ぐという大役を任されることになった。とてもプレッシャーはあったが、大勢のお客さんの声援や、海の中から見ると水中花火の綺麗さで、やり遂げた達成感でいっぱいになった。



図7 海女の大夜泳

5. 波及効果

わが家の子供達は、小さい頃から海に親しんでいて、母親があまであったこともあり、娘が高校生のときにあまになりたいと言い出した。現在は大学生となったが、あまの時期になると一緒に操業している。

娘が私の背中を見て海と親しんできたように、白浜町の子供達が磯根漁業の体験をする機会を増やす事が出来れば、大人になっても海の豊かさを忘れることなく、ひいては、あま漁業に就いてくれることも期待できるのではないかと思っている。

6. 今後の課題や計画と問題点

私の嫁ぎ先は、たまたま、あま漁業を行使できる権利があり、地元と繋がりがあある環境であったため、スムーズに就業し、技術も習得することができた。しかし、これから新たにあまを目指す人は、漁場管理に必要な協調性が求められる中で、地元のあまとの繋がりを持つことが何よりも重要である。そのために、まずは、地元の行事等に積極的に参加し、顔を覚えてもらい、自分はあまになりたいという意思を伝える必要がある。同時に、先輩のあま達が、限りあるアワビ資源を絶やさぬよう、殻長制限や種苗放流などの資源管理を継続的に実施してきたことを学ばなければならない。このように先輩のあまとあまを目指す者がお互いに理解し、実践できれば、技術を習得する機会も得られ、数年後にはあまになることを認めてもらえるはずである。

また、受入れ側のあまは、中途半端な気持ちで就業を希望する者に時間を費やし、指導することはない。今までに何人か地区外から移住し、あまになった方がいるが、例外無く、あまになるという強い気持ちを持ち、先輩との信頼関係を築いている。

現在、南房総市があまになりたい方を地域おこし協力隊員として募集し、隊員がまずは漁協職員の仕事を通じて、あまと交流し、信頼関係を築く取組を始めているが、信頼関係を築く1つの手段として、良い取組であると感じる。また、取組の中では県の協力により、漁業法など関係法令の研修やスクーバ潜水の技術も学ぶことができるので、漁業に関する基礎的な知識や地域で必要とされる技術を習得できる内容になっている。

一方で、あま漁業の収入だけで生計を立てることは、一般的には難しいと思うので、イセエビの刺し網漁業や農業などの兼業を考えていく必要がある。

私が所属する地区では、輪採漁場の獲り上げや平板の積み直しの中で、素潜りやスクーバ潜水の経験を積んでもらえるよう協力している。

今後、新規就業を目指す方々には、私の就業を支援してくれた先輩達から受け継いできたことやこれまで私自身が培った経験が参考になればと思う。

最後に私は、今年であまになり16年になった。いい仲間と出会えたことで、水揚げも上がり感謝している。これからも仲間たちと力を合わせて海の資源を守り、白浜町のあま漁業を支えていきたいと思っている。